The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松山先生を憶ふ
Author(s)	飯島, 溜三郎
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 92-95
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88766
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

永田氏を悼みて

寺部君子

この堂れあらむあざりはとこしへに
きみを德とし君をしのばむ

松山先生を憶ふ

飯島溜三郎

松山先生に十年間も敎を受けましたが、生來魯鈍の質、別段とり分けて特筆すべき材料を有ちませぬが、唯二三感じた点を述べて見ます。

先生の謹嚴な態度は、純粹な講義振りと相待つて特によかつたです。是は敢て私一人の言ではなかろう、恐らく聽講者一般の體驗せられたことだろうと思ふ。從つて私共は先生卽ち經典であり、經典卽ち先生であると感ぜられて、心から

傾聽されずには居られなかつた。先生平素の言動は、身は東京に居つて心は大阪、大阪に居つて心は東京と云ふ樣でなしに、心から其土に安んじられ、忠實に堂務を遂行されて、毫も倦怠の色がなかつたやうに拜察する。これが先生の偉大なる点であります。

一日論語朝講の終つた後聽講生某が先生に向つて、今日の講義は例日より早やかつた樣でしたが、何か先生に御用事でもございましてかと問ふた、すると先生は莞爾として、イヤ左樣じやない、私の都合がそこ迄より出來て居らなかつたので、書いて來ることにしたが、そこまでしか書いて來なかつたので、と答へられたが、なんと修飾のない温かいお答へでせう。

或る時事務所樓上で同友會發起人等相集り、何かの必要で聽講志望書綴の不足して居るのを喧しく搜し居たりしに、先生隣室にありて之を聞かれ、默つて御自身で立たれ、志望書綴をお手づから探して來て下されたことなどもある。又或る時同樓上で私共が何か評議をして居た時でした、先生はひそかに書庫(現今の閲覽室)の方へ行かれ、何か調べ居られ、遲れて歸られたこともある。多分あまり騷々しかつたのでと思ひました。又或る茶話會の席上でした、聽講生某が曰く、日曜の朝講後の講義(同人會と稱し日曜聽講後同人相會し輪讀の後先生に御講義を煩した會)を先生に引續いて願ふのは無理だ、先生にも用事がある、また遊ばねばならぬと言ひしに、先生には別段喜ばれる色もなく、徐に之に答へて、私の方はチョットも差支ない、遊んで居るもおなじだから、では志望者だけでやるがよかろうよと云ふ樣な風で、當り障りなく、講義は毫も倦ませられなかつた。で講義以外には、口より踐履の御方で、常人の樣に言を貴ばれなかつた。時に敎誡多術を以てせられた向もあるやに拜す、隨つて兎やかう先生を議するものがあるかも知れぬが、蓋しそは叔武が輩で、余をして對へしむれば、先生の牆は數仞と、申すことを躊躇しない積りである。

先生は勿論常に御孝心厚く、大概休日を利用

されて展墓の爲め歸鄕されるが例であつた樣に拜される。

忘れもせぬ、先生が、飯島君チョット後で話したいことがあるから二階へと仰せられたのは、今年二月十六日水曜の晩で、理學宗傳の講義が了つた後でした。何の御用かと思つて、先生の室に行くと、先生は、ほかじやないが、君都合が出來るなら金曜の晩においでたらどうじや。と云はれた、私ははいと答へしものゝ、金曜は文科講義でやゝ高尙の部である、隨つて素養のない私ども徒に聽くことのみ多きを恐れ、稍々躊躇し居たりしに。先生語をついで曰はれるやう、平野君や其他も近頃見える、家事の都合がゆるさなんだらコリヤどうも致方がないが、私のやるのは左樣むつかしくはないよ、本も別にいるではない、此方から摺つたものを差上るから、君義理の學は廢さないようにするがよい、と、是は蓋し私の晩學に同情された御敎訓でせう、かように、ためらふ私を丸で幼稚園の先生の樣に提撕されたには、有がたくて發憤せずには居られなかつた。で感謝と同時に次回から聽かして頂くことをお願しまして、次の金曜十八日の晩の朱子語文精要百四五頁の講義を聽かして頂きました。次は水曜二十三日の晩でした、理學宗傳卷の十七書經序の講義が了つて、今晩はチョッと氣分が惡いから、この邊りでと定刻より十分程早くお止めになられたのが、是が名殘りの講義で、御病床につかれて二ケ月後の同日同刻に、鳥瀉病院で溘然として逝去された。思ひ出すも涙の種、金曜の講義はそれが聞き始でまたきゝ終りであつた。

先生は書庫を早く開いて、皆さんに御便宜を與へたいと一生懸命にせきこんでおいでになつたが、時あたかも嚴冬に際し、しかも火の氣のない、殊に新築の冷え切つた庫の中で、書籍の整理に不斷の努力が因をなして、餘病を幷發、ついに腦を侵されて再び起つ能はざるに至りしは、かへす〳〵も殘念でたまりません。

先生はあの四十度を昇降しつゝある御病体でも、チョットも悶へ苦まれなかつた、また常人のやうに無理を言はれなかつた、眞に神色自

若たるものがあつた。病まれて數日後病床を見舞ふたら、先生は四十度近くの高熱の時でした。君に金曜の聽講をすゝめて置いたから、どうぞしてと思つたが、どうもいけなかつた。書庫を早く公開したい。聽講者は相變らず來るだろうな。懷德堂の櫻はもうつい咲くだろうな。などと、何と申しても先生の心に懷德堂は離れませんでした。

奥樣の御話だが、先生は病氣がなほつたら、皆聽講生と一緒に爰で御飯を戴かうな。と病床で仰せられたそうです。噫温い先生であつた。嘗て西村先生は空堂に於ても講ずる、と熱心に仰せられたが。やがてこの剛健の意氣と、松山先生の踐履不息の意志とは、故永田氏を初め、大阪の富める善人諸士と相まつて、世道のため精靈は長へに堂を守護されるであろう。

私は一昨年の夏、兼て所持の孔子の像の掛軸に、賛を書いて戴いたが、先生は勿体ない程謙遜されて、君だから書くが、誰にも見せない樣にしてくれ。と夫れは實に立派なもので、函書まで丁寧に書いて下さつた。是も今は先生のよき記念で、生涯思出の種、且永久の寶である。今其の賛及函書全文を左に錄す。

不厭不倦　不憂不悶　授徒三千　傳道後昆
威而不猛　恭而克安　遺象凛然　誰不肅觀
後學松山直敬題

（函書）　飯島溜子　一日齋畫工所寫孔子像
來求余賛焉　余素不修辞章　又不習書　顧
溜子學於懷德堂九年干今　交親固非尋常也
因不顧拙陋敢書以與之

大正乙丑八月　春城松山直識